

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

## 石川県高体連登山部顧問講習会

6月に行われた北信越大会の際に、石川県高体連の専門委員長の深田茂先生から、11月に行う同県の顧問講習会で講師をしてほしい旨依頼を受けた。昨年秋以来、北川甚一先生や深田先生からは、審議委員会の設置について情報交換をしたり、相談を受けたりして、連絡をとりあったりしてきた。そんな経過もあるうえ、もとより同じ北信越地区のこと、僕でよければと二つ返事でお引き受けした。

これまでも毎年、石川県高体連登山部では、顧問講習会を行ってきたとのことだが、今年の講習会は那須事故を受けて県に対して国からの予算付けがあり、県教委がそれを使う形で従来から行われていたこの講習会に乗ってくる形で開かれた。講習会は11月9日、10日の2日間の日程で行われ、初日が講義、二日目は実技を行った。参加された先生は石川県内の山岳部の顧問の先生7校、15名（石川県の加盟校は8校とのこと）。半数はよく知っている顔見知りの先生方だったが、若い先生が5名ほどおられ、熱心に参加されていたのが、印象に残った。

講習会は13時30分から始まり、まず県教委の担当者から、30分程度昨年11月に出されたスポーツ庁の通知についてのレクチャーがあった。県の説明では、冬山とは「雪のある山」を意味するので、6月の残雪期の山も対象になるということであったが、率直な感想として、これはどう考えても「過剰反応」であり、行政側の拡大解釈だと感じた。行政の立場であるような通知を読むと、そうなるのかと思わされた。石川県に限らず、あの通知が各高校へ流されるときにはどうしてもフィルターがかかる。

その後、私が17時までおよそ3時間にわたって、お話をさせていただいた。正直、県教委の冬山に対するスタンスとは相いれない部分を多く含む内容となったが、それは当然と言えば当然である。私の話は2部構成で、第1部では、那須雪崩事故の報告と提言を話させていただき、その後それを受けて私自身も関わってきた長野県の冬山登山を行う上での具体的なことについて、状況をお話した。これまでもいろいろなところで呼ばれて話をしてきたが、那須の雪崩事故を重く受け止めれば受け止めるほど、それから学ばねばならないという思いが強くなる。那須の事故から学ぶことは、当然あのような事故を再び起こしてはならないということだ。しかし、それは高校生の冬山を禁止するということには与しない。長野では、昨年も例外的に冬山での活動が行われた。それは自立した登山者を育てるための安全教育に必要なことからである。あちこちの県で、「冬」「雪」というだけで過剰反応が発生していることに危惧を持つ。

僕の話の第2部は、これまでいくつかの県や国立登山研修所での研修会でお話ししてきたことを中心に組み立てたもので、日頃僕が大町岳陽高校で行っている山岳部活動についての考え方を紹介し、通年で活動するうえでの安全対策としてどのようなことに留意しているかという内容だ。拙い話を熱心に聞いてくださった石川県の先生方に感謝である。講習会終了後、懇親会も兼ねた夜の部も話は尽きず、深更まで議論は続いた。

翌日は、金沢市近郊の鶴来町にある倉ヶ岳という山に移動し、根石修先生を講師に、僕も補助的に参加させていただき、生徒を引率する際のロープワークの講習会を行った。

ロープは20m、生徒の持参装備は120cmのスリング1本と60cmのスリング2本、それに安全環つきカラビナ1枚、環なしカラビナ2枚という想定の中で、フィックスロープの通過技術を研修した。今年はじめに顧問になったという青木優先生が熱心にかつ前向きに参加してくださり、何はともあれこういった技術の有効性を知り、興味をもってくださったことは大きな収穫だった。それこそ、ロープの口の字も知らない新人の顧問先生の口から、「ロープ大事ですね。」ということばと、「山岳部の顧問をしていて楽しい。」ということばを聞いたのは嬉しかった。

この講習会が意味ある講習会だったと満足して、紅葉の白山白川郷ホワイトロードから飛騨路を抜け、5時間の道を松本まで帰った。

深田先生からは「先日は、大変お世話になりました。11.9の顧問研修会、長時間の熱いお話、ありがとうございます。興味深い安全登山のお話が聞けて、石川の顧問の先生たちは、貴重な時間が過ごせたと考えております。『自立した登山者』を目指して、自ら経験を積み、逞しい生徒の育成を目指していきたいと思います。」、また青木先生からも「顧問としてこれから学んでいきたい」というお礼のメールをそれぞれいただいた。

## 長野県学校体育・スポーツ研修講座

### 「高校生が安全に登る冬山・春山登山」

長野県の高校山岳部顧問向けの研修講座「高校生が安全に登る冬山・春山登山」が、長野県体育センターの主催で開催された。これは、那須の事故を受けて、長野県教育委員会が作成した「高校生の冬山・春山登山における安全確保指針」を踏まえ、事故を未然に防ぎ、安全に登山が実施できるよう、講義や実習を通して学び、体育・スポーツ指導者としての資質向上を図るために開催されたものである。県としては指針を策定する際に、冬山全面禁止ではないことを前提に、実施する際の顧問の資質向上を掲げており、その中で今年から新たに取り入れられた研修講座である。

長野県は、高体連が表立って講習する態勢にはなっていないが、この研修にあたっては、事前に登山専門部の池迫先生を中心に主催の体育センターと中身を検討してもらった。具体的には山岳総合センターの講座担当の傘木靖さんに午前中の講義と実習を、防災科学技術研究所の中村一樹さんに午後の講義とワークショップを担当していただいた。県が昨年購入したビーコンを使っての実習や、昨年高雪研で宇都宮大学の近藤先生に協力していただいた手法なども取り入れて、冬山登山における安全について研修を深めた。参加したのは、県内の15人の顧問。

傘木さんの話は、自らの高校時代の山岳部の話から始まり、積雪期の山の安全登山について主に雪崩のリスクをどう避けるかを中心にしたものだった。話の後半でビーコンについてのレクチャーを受けたのち、実際にビーコンを使って実習を行った。午後の中村さんの話は、3部構成となっており、「雪と雪崩の科学」「雪崩のリスクについて」についての講義のあと、実際に冬山に生徒を引率している場面を想定し、そのとき顧問としてどのような判断をするかという課題について、ワークショップを行った。長野県内の高校山岳部顧問対象の研修（講習）は今年3回目。この流れを次年度以降も絶やすことのないような予算付けを県にはお願いしたいし、この流れの中で一人でも多くの顧問の先生方が山岳部の顧問として育ってほしいと思う。